

## ラトヴィア語童話注解： *Baltā Pasaka*

～イマンツ・ジェドアニスの作品 *Visādas Pasakas* より抜粋～

田 中 研 治

### 1. 原著者について

ラトヴィア共和国を代表する詩人イマンツ・ジェドアニス (Imants Ziedonis、1933年5月3日生まれ) は、リーガ行政区 (県に相当?) スルォカ (Sloka) 地区の出身 (生家は漁業を営んでいた) で、ツクムス第一中等学校を1952年に卒業した。その後ラトヴィア大学に入学し、1959年に同大学を卒業した (歴史・言語学部のラトヴィア語・ラトヴィア文学科)。1964年にはモスクワのゴーリキー世界文芸研究所での上級文芸課程を修了した。旧ソ連邦の体制とは微妙な距離を保っていた人物ともいわれ、その影響であろうか、彼は旧ソ連邦時代に注目を集めるようになった最初のラトヴィア詩人とも評されている。若い頃、彼は様々な職業を経験している。図書館員をはじめ、道路建設の労働者、教員、編集者などである。

彼が出版した最初の詩集は *Zemes un sapņu smilts* (『大地と夢の砂』、1961年) であり、その後極めて精力的に多彩な詩作品をはじめ、多くの散文作品などを継続的に発表している。1961年の処女作発表以来、今日に至るまで、詩、散文、民話、童話、随筆など、少なくとも35冊の著書を出版している。

旺盛な作家活動に加え、彼は様々な組織を統括する中心的人物としてもその

---

\*2010年1月25日受理。

非凡な力量と才能を遺憾なく発揮している。例えば、1966年から67年まではラトヴィア作家連盟の書記を務めたり、1987年から1993年まではラトヴィア文化財団の理事長職に就いている。国際的にも早くから詩人としての顕著な活動が認められ、同時に童話作家としても高い評価を受けるようになり、アンデルセン賞を受賞（1970年代？）している。（序ながら、神戸市とリーガ市が1974年に姉妹都市提携を結び、両都市間の相互文化交流を開始した関係で、かつて1978年6月に彼は「アベ・ソル混声合唱団」に同行して神戸市を親善訪問したことがある。その際、神戸新聞紙上で彼の詩作品が一部簡単に翻訳・紹介されたことがある。）

今回取り上げる彼の童話作品は *Visādas Pasakas* (Rīga [Liesma], 1983) (『様々な童話』) に収録されているものである。*Visādas Pasakas* 中の24話は、いずれもかつて出版された次の3冊の作品集の中に初出したものである。

1. *Krāsainas pasakas* (1973) (『色のついた童話』)
2. *Lāču pasaka* (1976) (『熊たちの童話』)
3. *Blēņas un pasakas* (1980) (『無意味な話と童話』)

*Visādas Pasakas* における作品の少なくとも最初の11話は上記1の作品集から選ばれたもので、すべてなんらかの「色彩」に関わる短い物語である。なぜ「白い童話」から始まるのか、定かではないが、「白色」に続いて、「黄色」、「茶色」、「青色」、「黒色」、「赤色」、「紫色」などの順で色彩童話が並べられている。

ラトヴィア語女性名詞 *pasaka* (複数形は *pasakas*) には、「(昔からの) おとぎ話、童話、作り話」などの意味があるが、本稿では一般的な意味の「童話」をあてる。

## 2. 注解①～⑦

今回は、*Visādas Pasakas* に収録された24話のうち、最初の童話「白い童話」

を取り上げる。注解にあたり、まずテキスト原文をいくつかのパラグラフごとに分けて提示し、各原文中の語彙的な意味や統語的な用法などを説明してから、最後にその部分全体の和訳を示すことにする。以下の和訳文は内容本位ではある（適宜、括弧を用いた補足表現を加えている）が、童話的表現から程遠い硬い表現もありうる。もっと適切で滑らかな日本語表現があるかもしれないので、ご教示いただければ幸いである。

原文中の長いセンテンスがいくつかのコンマで区切られている場合でも、和訳では必ずしも忠実に読点を使用せず、句点で区切った場合もある。また、和訳全体の表現では、注解中で示す訳語をそのままを踏襲せず、日本語としての自然さを優先した個所がある。

なお、原文中の各センテンス番号は筆者が便宜上付けたものである。必要に応じて簡単な英語相当語句を添えるときは、それをイタリックで示す。また、名詞、代名詞、形容詞、動詞などに関わる形式上の情報のうち、性別、人称、数などを示す場合は、できるだけ省略表示を用いないことにする。

### *Baltā Pasaka*

① Vakar uzkrita pirmais sniegš. ② Nu viss ir balts. ③ Tik balts, ka nekā nevar atšķirt. ④ Baltā vīstīņa izdēja baltu olu un pazaudēja to sniegā. ⑤ Baltais gailis dziedāja baltu dziesmu, tā ieskrēja pažobelē, piesala tur un palika karājoties kā balta lāsteka. ⑥ Baltajai vāverei piedzima balti vāverēni, ielēca baltajos koku zaros, un vāvere nevar vairs tos atrast. ⑦ Visi koki — balti, eju pa mežu, nevaru saprast, kur koks, kur baltā diena.

タイトルである *Baltā Pasaka* の意味は「白い童話」である（英語なら *The White Tale* となる）。Baltā「白い」は形容詞 balts の限定形（女性・単数・主

格)。即ち、文脈上、定冠詞的な機能を有する形容詞の形。女性形になるのは pasaka「童話、おとぎ話」の性別と一致させるため（ここでは単数・主格）。限定形形容詞（特定のあるものの性状、即ち「旧情報」への言及）と対立する形は単純形形容詞（不特定のあるものの性状、即ち「新情報」への言及。不定冠詞的な機能を持つ）と呼ばれ、それぞれ特定の名詞類の曲用に従って語形変化する。

① Vakar「昨日」は副詞（因みに、類似語形の vakars は男性名詞で「夕方」の意味。⑫の文を参照）。uzkrita「～が降った」は動詞 uzkrīst の 3 人称・単数・過去。接頭辞 uz- は本来前置詞だが、ここでは「完了体」の動詞前接辞。しばしば「～の上に」などの意味特徴を併せ持つ。この動詞の主語が pirmais sniegš「最初の雪、初雪」。pirmais「最初の」は限定形形容詞で、男性・単数・主格。sniegš「雪」は男性名詞・単数・主格。

全体の意味は、「昨日、初雪が降りました」。

② Nu「今は、今や」（副詞）。包括代名詞 viss「全てのものが」（男性・単数・主格、*everything*）。ir : be 動詞（3 人称・単数・現在）。balts は既出の形容詞だが、ここでは単純形（男性・単数・主格）。

全体の意味は、「今や全てのものが白くなっています」。

③副詞 Tik「とても」は、そのあとの接続詞 ka と関連語句になっていて、ほぼ英語の *so...that* 構文に相当。ラトヴィア語では様態節 (*clause of manner*) に分類され、ka の直前にコンマを置くのが正用法。ここでは Tik の前に、Viss ir を補って解釈する。否定代名詞 nekā は nekas (*nothing*) の男性・単数・属格。次の nevar (法助動詞 nevarēt [*to be unable to*]) の 3 人称・単数・現在) とともにいわゆる「二重否定」表現になっているが、ラトヴィア語では意味的に否定のままであり、相殺的肯定にはならない。nekā が属格になるのは、否定構文の場合、他動詞の目的語として名詞の対格ではなく、属格をとることがあるため、ここでは動詞 atšķirt「区別する、見分ける」(nevarēt の後に来る不定形)

の目的語。なお、nevar atšķirt の主語は明示されていないが、ここは否定文なので、総称的な「人は」を主語に採用すれば、「誰も（～ない）」となる。

全体の意味は、「全てのものが白一色なので、誰も何も見分けられません」。

④ Baltā は balts の限定形形容詞で、女性・単数・主格。vistiņa は女性名詞「雌鶏」の指小辞形で、単数・主格。動詞 izdēja（不定形は izdēt）の主語は vistiņa で、その意味は、ここでは「(卵を) 産んだ」(3人称・単数・過去)。動詞前接辞 iz- を持つこの形は、いわゆる完了体動詞で、「卵を産み終えた」が原義（前接辞 iz- の基本的な意味特徴は「～から外へ」で、ie- の逆を表す。ie- については、⑤の文を参照）。完了体動詞は動作・行為が継続中でなく、すでに完了していることを示す。動作・行為が継続中の場合は、不完了体動詞（即ち、動詞前接辞のない語形）を使用する。baltu olu 「(一つの) 白い卵を」(baltu は単純形形容詞で、女性・単数・対格。olu は女性名詞 ola 「卵」の単数・対格)。un = and。

動詞 pazaudēja（3人称・単数・過去）の不定形は pazaudēt 「～を失う、なくす」(前接辞 pa- はここでは「完了」を表すが、一方、「少し」の意味特徴も併せ持つ)。to は指示代名詞 tā (that: 女性・単数・主格) の対格形で、意味は「それを」、即ち「卵を」。男性名詞 sniegā は sniegs 「雪」の単数・位格で、意味は「雪の中で、雪の中において」。

全体の意味は、「白い雌鶏が白い卵を産むと、(雌鶏は) それを雪の中でなくしてしまいました」。

⑤ Baltais は balts の限定形形容詞で、男性・単数・主格。gailis 「雄鶏は」(男性・単数・主格)。動詞 dziedāja の不定形は dziedāt 「歌う」で、ここでは3人称・単数・過去。baltu は形容詞 balts の単純形で、ここでは男性・単数・対格。dziesmu は女性名詞 dziesma 「歌」の単数・対格。従って、baltis gailis から dziesmu までの意味は「白い雄鶏が白い歌を歌った」。tā は副詞で「そうすると、それから」の意味。tā には同形異義語の指示代名詞（女性・単数・主格。

英語の *that* の形もあるが、ここでは副詞に解釈する。

動詞 *ieskrēja* の不定形は *ieskriet* で、「～にぶつかる」が原義だが、この文脈では「～の中へ駆け込む、もぐり込む」となる。(因みに、単純形の動詞 *skriet* の意味は「走る」である。) ここでは 3 人称・単数・過去。動詞前接辞 *ie-* は基本的に「～の中へ」の意味特徴を持つ (即ち、*iz-* とは逆の意味) が、時には「行為の開始」や「急な動作」を示す。主語は明示されていないが、意味的には、前出の *balta dziesma* の主格形 *baltā dziesma* 「(その) 白い歌は」がそれにあたる (*baltā* は限定形)。 *pažobelē* 「軒下で、軒下において」は女性名詞 *pažobele* の単数・位格。動詞 *piesala* の不定形は *piesalt* 「凍りつく」で、ここでは 3 人称・単数・過去。主語はやはり *baltā dziesma*。動詞前接辞 *pie-* をもつこの形は完了体動詞。 *tur* は副詞で、「そこで」 (*there*) の意味。 *un* = *and*。動詞 *palika* の不定形は *palikt* 「～のままである、残る」で、ここでは 3 人称・単数・過去。動詞前接辞 *pa-* をもつ完了体動詞 (前接辞 *pa-* は「純粹な完了」の意味を添える)。

*karājoties* は再帰動詞 *karāties* 「ぶら下がる」の動名詞形 (別名、副分詞。文中で副詞句として機能する) で、意味は「ぶら下がったまま」。意味上の主語は、いうまでもなく前出の *baltā dziesma*。 *kā* は頻出する比較・対照・類比の接続詞で、ここでは「～のように(な)」 (*as*) の意味。これ以外にも、疑問副詞 (*how*)、疑問代名詞 (*what*) などの意味もある。 *balta* はここでは単純形形容詞、女性・単数・主格。女性名詞 *lāsteka* の意味は「氷柱 (つらら)」 (単数・主格)。 *kā balta lāsteka* の意味は「まるで白い氷柱のように」。

全体の意味は、「白い雄鶏が白い歌を歌いました。そうすると、その歌は、軒下へするりともぐり込み、そこで凍りついて、まるで白い氷柱のようにぶら下がったままでした」。

⑥ *Baltajai* は *balts* の限定形で、女性・単数・与格。 *vāverei* 「リスには」は女性名詞 *vāvere* 「リス」の単数・与格。動詞 *pie dzima* の不定形は *pie dzimt* 「生

む」で、ここでは3人称・単数・過去・完了体（前接辞 *pie-* はしばしば「到達」などの意味特徴を持つ）。*balti vāverēni* の *balti* は男性・複数・主格。男性名詞 *vāverēni* は *vāverēns* 「リスの子供」の複数・主格。*balti vāverēni* が *piedzima* の主語。ここまでの意味は「白いリスには白い子供たちが生まれていた」。

動詞 *ielēca* の不定形は *ielēkt* 「飛び跳ねる」で、ここでは3人称・複数・過去・完了体（前接辞 *ie-* の意味特徴については前出⑤の文で説明済み）。主語は前出の *balti vāverēni*。*baltajos* は限定形で、男性・複数・位格。*koku* は男性名詞 *koks* 「木」の複数・属格。男性名詞 *zaros* は *zars* 「枝」の複数・位格。ここまでの直訳は、「（その子供達）は）白い木々の枝のところで（飛び跳ねた）。*un = and*。女性名詞 *vāvere* 「リス」は文脈上、前出の「白いリス、即ち、母リス」。

法助動詞 *nevar* は③の文に既出。副詞 *vairs* の意味は「もはや～ない」(*no longer*)。 *nevar vairs* は二重否定であるが、ここでは肯定にならず、否定の意味を保持（③の文で類似例既出）。*tos* は指示代名詞 *tas* (*that*) の男性・複数・対格で「それらを（即ち、子リス達を）」。動詞 *atrast* 「～を見つける」は法助動詞のあとなので不定形（前接辞 *at-* は基本的に「～の方へ」、「～から離れて」、「繰り返し」などの意味特徴を有する）。

全体の意味は、「白いリスには白いリスの子供達が生まれていました。それらは白い木々の枝で飛び跳ねました。すると、母リスはもう子リス達を見つけることができません」。

⑦ *Visi* は包括代名詞 *viss* 「全ての」の男性・複数・主格。*koki* は男性名詞 *koks* 「木」の複数・主格。*balti* は *balts* の男性・複数・主格で単純形。*balti* の前のダッシュは *be* 動詞の役割を担うので、この部分の意味は「全ての木々は白い」。

動詞 *ēju* の不定形は *iet* (*to go*) で、ここでは1人称・単数・現在。主語代名詞 *es* 「私は」は省略されている。このような複文構造においてはしばしば主語代名詞は省かれる。後続の *nevaru saprast* の場合も同様である。対格名詞を

支配する前置詞 *pa* は場所を表し、*across, over, through, on, in* などの意味を有する。その目的語の *mežu* は男性名詞 *mežs* 「森」の単数・対格。（なお、*pa* は文脈に応じて与格名詞を支配する場合もあり、「それぞれの」などの「配分的」意味を表す。）ここでは「森の中を」（*in the forest*）の意味なので、この部分は「私は森の中を歩く」の意味。

法助動詞 *nevaru* は③の文で既出。ここでは 1 人称・単数・現在。動詞 *sa-prast* は不定形で、意味は「分る、理解する」（前接辞 *sa-* は基本的には「一緒」、「合体」、「分裂」などの意味特徴を持つ）。目的語が *kur* (*where*) 以下の内容となる。即ち、*kur koks* は本来、*kur ir koks* (*where the tree is*) の意味であり、同様に、*kur baltā diena* は本来、*kur ir baltā diena* (*where the white day is*) の意味である。*baltā* は限定形で、女性・単数・主格。*diena* は女性名詞・単数・主格で、意味は「日、昼間」。

全体の意味は、「すべての木は白くて、私が森の中を歩くと、どこに木があるのか分かりません。またどこに白い日（光）があるのか分かりません」。

「私」が誰なのか、この時点ではまだはっきりと分らないが、最後の「私の住所」（⑭の文）という語句の中でやがてそれが示されることになる。

「白い日」という上の日本語は馴染みのない表現であるが、「太陽の光」などを意識する内容であると思われる。実際、日本語でも「白日」といえば「照り輝く太陽」であることを筆者は直感的に想起する。（「太陽歌謡」（太陽を歌ったラトヴィア民謡）に現れる〈白色〉の持つ多くの連想的意味や、固有の民俗的意味の研究に関しては、本稿末尾の追記 1 を参照。）

### 3. 注解⑧～⑩

⑧ *Dūmi no skursteņiem kāpj balti, un tintes pudelē tinte kļuvusi balta — nezinu, vai jūs redzēsiet, kas te uzrakstīts.* ⑨ *Ēdam tikai baltu maize un*



dzeram baltu kafiju. ⑩Šorīt tīrīju zābakus — zābaksmērs arī balts.

⑧ Dūmi は複数形のための男性名詞で、ここでは主格。意味は「煙」。前置詞 no は、場所や時などを示すが、ここでは場所の意味で、「～から」(*from, out of*)。単数名詞を支配するときは属格支配。男性名詞 skursteņiem は「煙突」の意味で、ここでは複数・与格（なぜ属格ではなく与格かというと、どの前置詞の場合でも、それが複数名詞を支配するときは、その名詞は与格になるのが原則だから）。

動詞 kāpj の不定形は kāpt 「～が上る、昇る」で、ここでは 3 人称・複数・現在・不完了体（行為の継続）。主語は dūmi. balti は形容詞で dūmi を修飾する（普通の語順なら、No skursteņiem kāpj balti dūmi となる）。balti を強調するための語順転倒になっている。この部分の意味（直訳）は「煙突からは白い煙が立ち昇っている」。

tintes pudelē の意味は「インク瓶においては、インク瓶の中では」（tintes は女性名詞 tinte 「インク」の単数・属格。女性名詞 pudelē 「瓶」は単数・位格）。tinte 「インク」は単数・主格で、次の kļuvusi の主語。kļuvusi は動詞 kļūt 「～になる」の過去能動分詞形（tinte に合わせて女性・単数・主格）で、直前に be 動詞 ir （3 人称・単数・現在）を補えば、全体が現在完了形を構成する。balta は変化の結果を表す形容詞（単純形）で、女性・単数・主格。従って、この部分の意味は「インク瓶の中では、インクが白くなってしまっている」。

動詞（否定形）nezinu はここでは、1 人称・単数・現在で、「私は知らない、分らない」の意味。語彙化した不定形 nezināt は存在せず、nezinu は zināt 「知っている」に否定接頭辞 ne を付加した派生語（*derivative*）と考える。vai は「～かどうか」(*if, whether*) の意味の接続詞で、疑問の内容を導く（ここではいわゆる *yes/no-question* の意味内容）。jūs 「あなた方は」は人称代名詞・2 人称・複数・主格（暗に複数の読者を想定しているのだ）。

動詞 *redzēsiet* は不定形が *redzēt* 「～を見る」で、ここでは2人称・複数・未来。*redzēsiet* は *kas* 以下全体を目的語にする。*kas* は疑問代名詞 *what* に相当し、「何が」の意味（男性・単数・主格）。*te* は副詞で、「ここに」(*here*)。*uzrakstīts* は動詞不定形 *uzrakstīt* 「～を書き終える」（ここでは前接辞 *uz-* は語彙的な意味特徴「～の上に」の付加よりも、機能的に「完了体」を意味する）から形成される過去受動分詞で男性・単数・主格。この分詞の直前に *be* 動詞 *ir* を補うと、「(ここに) 何が書かれているか」という完了受身の意味になる。

全体の意味は、「煙突から立ち昇っている煙は白いです。そしてインク瓶の中では、インクが白くなってしまっています。——(だから) ここに何が書かれているかがあなた方に見えるかどうか、私には分かりません」。

⑨動詞 *Ēdam* の不定形は *ēst* 「食べる」で、ここでは1人称・複数・現在。*tikai* は副詞で、「～だけ、ただ～」(*only*) の意味。*baltu maizi* は「白いパンを」(*baltu* は単純形形容詞。女性・単数・対格、*maizi* は女性名詞・単数・対格。主格形は *maize*)。動詞 *dzeram* の不定形は *dzert* 「飲む」で、ここでは1人称・複数・現在。*baltu* は上と同様の形。女性名詞 *kafiju* は *kafija* の単数・対格で、意味は「(白い) コーヒーを」。

全体の意味は、「私たちは白いパンだけを食べて、白いコーヒー(だけ)を飲みます」。

⑩副詞 *Šorīt* はもともと複合語(原形は *šis* ‘*this*’ プラス *rits* ‘*morning*’) で、意味は「今朝」。動詞 *tiriju* の不定形は *tīrīt* 「～をきれいにする、～を磨く」で、ここでは1人称・単数・過去。男性名詞 *zābakus* は *zābaks* 「長靴」の複数・対格。*zābaksmērs* はここでは男性名詞だが、女性名詞形もある。意味は「長靴用光沢剤、即ち「靴クリーム」」。副詞 *arī* の意味は「～もまた」。*balts* は何度も出てきたが、単純形・男性・単数・主格。この前に *be* 動詞 *ir* の過去形 *bija* (3人称・単数) が省略されている。

全体の意味は、「今朝、私は長靴を磨きました——靴クリームもまた白いでし

た」。

#### 4. 注解⑪～⑬

⑪ Gauja balta — iemetu spingu, izvilku baltu lidaku, uzšķērdū lidaku — vēderā tai balts pilēns (norijusi rīla), iespraudu pilēnam astē šito zīmīti, palaidu, lai lido. ⑫ Ja saņemsiet, pabarojiet, apgrieziet spārniņiem galus, lai neaizlaižas, un katru vakaru sildiet šim vēderu ar baltu termoforu. ⑬ Kad izdēs zelta oliņu, tad man atrakstiet!

⑪ Gauja「ガウヤ川」(女性名詞)はラトヴィア国内の河川名。リーガから遙か東部のヴィゼメ中央部山岳地帯に源流を持ち、一旦北上するがその後西へ向かい、最後はリーガ湾へ流れ込む川で、全長452km。balta(単純形・女性・単数・主格)の前に be 動詞 bija(3人称・単数・過去)を補う。ガウヤ川の周辺に雪が積もっている光景が想像される。

動詞 iemetu は不定形 iemest「～を投げ入れる」で、ここでは1人称・単数・過去(前接辞 ie- については⑤の文を参照)。spingu は男性名詞 spinings「擬餌付き釣具(回転式の擬餌付き釣り針をもつ釣具)」の単数・対格(最後の和訳では、単に「釣具」とする)。動詞 izvilku は不定形 izvilkt「～を引っ張る」などの意味がある。ここでは「～を釣り上げる」の1人称・単数・過去(iz- については④の文を参照)。baltu lidaku の意味は「白いカマスを」(lidaku は女性名詞 lidaka の単数・対格)。動詞 uzšķērdū の不定形は uzšķērst「～を切り開く、～を解剖する」で、ここでは1人称・単数・過去。その目的語が lidaku で、上述の lidaku と同形。

vēderā は男性名詞 vēders「胃、腹」の単数・位格。tai は指示代名詞 tā (that) の女性・単数・与格で、女性名詞 lidaka「カマス」を受けていて、ここでは「そ

のカマスには」の意味。balts の前に *be* 動詞 *bija*（3 人称・単数・過去）を補う。*pilēns*「アヒルの子」は男性名詞・単数・主格。ここでは全体が与格の *tai* を用いた所有構文であり、「そのカマスには（その腹の中に）白いアヒルの子があった」が直訳で、即ち「そのカマスの腹の中には白いアヒルの子がいました」となる。

（*norijusi riļal*）の *norijusi* は動詞不定形 *norīt*「吞み込む」の過去能動分詞（女性形）で、直後に *be* 動詞の *bija*（前出）を補うと、この部分はいわゆる複合時制（過去完了）になり、*riļa*「豚のような大食漢」が主語になる。「豚のような大食漢が吞み込んでしまっていた」ぐらいの意味か（前接辞 *no-* の基本的意味特徴は「下降、分離、完成」などである）。

動詞 *iespraudu* は不定形 *iespraust*「～を付ける、～を差し込む」の意味で、ここでは 1 人称・単数・過去（*ie-* については⑤の文を参照）。*pilēnam*「アヒルの子に対して」は前出 *pilēns* の単数・与格。*astē*「尻尾のところに」は女性名詞 *aste*「尻尾」の単数・位格。直訳は「そのアヒルの子に対してその尻尾の部分に」となる。*sito* は指示形容詞 *šitas* の女性・単数・対格。*zīmīti*（女性名詞 *zīmīte*「メッセージ」の単数・対格）にかかり、「このような（次のような）メッセージを」の意味になり、全体が動詞 *iespraudu* の目的語（メッセージの具体的な内容は、Ja 以下の部分で示される）。

動詞 *palaidu* は不定形 *palaist*「～を放つ、解放する」の意味で、ここでは 1 人称・単数・過去・完了体（*pa-* の基本的な意味特徴については、④の文を参照）。*lai lido* は「（アヒルの子が）飛べるように」。 *lai* はしばしば祈願文的な用法で使用されるが、ここでは目的を表す用法。ここでの動詞 *lido*（不定形は *lidot*「飛ぶ」）は 3 人称・単数・現在。

全体の意味は、「ガウヤ川は白いでした——私は（川に）釣具を投げ入れて、白いカマスを釣り上げました。私がそのカマス（の腹）を切り開いたところ、その腹の中には白いアヒルの子がいました（豚のような大食漢がそれを吞み込

んでいたのです！)。私はそのアヒルの尻尾に、次のようなメッセージを差し込んで、そのアヒルが飛べるように放してやりました」。

序ながら、文中のカマスは「カワカマス」の種類であろうが、ラトヴィアの百科事典や同国の民俗文化を紹介する児童用書物、あるいは児童用絵画集に載っているカマスの挿絵の色は、全体が「白」ではなく鮮やかな「緑」である。ある説明によれば、体長は大きなもので約150cm、重さは35kgを超えるという。従って、アヒルの子などは簡単に呑み込まれてしまう（「緑のカマス」については本稿末尾の追記2を参照）。

⑫ Ja は「もし～なら（条件）」(if) にあたる接続詞。動詞 saņemsiēt は不定形が saņemt で、「もらう、受け取る」などが原義であるが、この文脈では「出会う、出くわす」などが適切か。ここでは2人称・複数・未来（sa- については⑦の文を参照）。動詞 pabarojiet は不定形が pabarot 「餌を与える」で、ここでは2人称・複数・命令形（pa- については④の文を参照）。ここまでの意味は「もし（あなた方が）（このアヒルの子に）出会うことがあれば、餌を与えてください」。

動詞 apgrieziet の不定形は apgriezt 「～（の周り）を刈り込む」（前接辞 ap- の基本的な意味特徴は「～を回って」）で、ここではやはり2人称・複数・命令形。この動詞の目的語が spārniņiem galus。spārniņiem は男性名詞 spārns 「翼」の指小辞形 spārniņš の複数・与格。galus は男性名詞 gals 「端、先端」の複数・対格。目的語全体は「翼については先端部分を」の逐語的意味を表し、結局「翼の先端部分を」となる。lai は目的を表す接続詞で、動詞 neaizlaižas （否定の接頭辞を除いた不定形は aizlaist、ここでは3人称・単数・現在）と結びついて「（それが）飛び立たないように」の意味を表す（前接辞 aiz- の意味特徴は基本的には「～から離れて、～から去る」だが、「阻止、覆うこと」などもある）。

katru vakaru は「毎夕方には」の意味で、katru は包括代名詞 katrs 「各々の」（each）の男性・単数・対格。vakaru は男性名詞 vakars 「夕方」の単数・対格。

全体が副詞句であり、文法的には「副詞的対格」と呼ばれる（頻度を示す時間名詞句～「毎週、毎月」など～がこの形式をとる）。動詞 *sildiet* の不定形は *sildīt*「温める」で、ここでは2人称・複数・命令形。指示代名詞 *šis* は *šis* (*this*) の男性・単数・与格で、「この（アヒルの）ために」の意味。*vēderu* は⑪の文に既出の *vēders*「胃、腹」の単数・対格。*ar* は手段を示す前置詞で、支配する名詞は具格（この格形は単数・対格、および複数・与格と同形）をとる。*baltu* も *termoforu*「湯たんぽ」（男性名詞 *termofors*）も従ってどちらも単数・具格になっている（実際は単数・対格と同形）。

全体の意味は、「もし（あなた方が）このアヒルの子に出会うことがあれば、餌を与えてください。その翼の先端部分をぐると刈り取って、それが飛び立たないようにしてください。そして、毎夕方にはこのアヒルのために、その腹の部分を白い湯たんぽで温めてやってください」。

⑬ *Kad* 以下もメッセージの内容になっている。*Kad* は接続詞で「～のとき」。動詞 *izdēs* の不定形は *izdēt*「（卵を）産む」（*iz-*については④の文を参照）で、ここでは3人称・単数・未来（主語は明示されていないが、文脈上、「そのアヒル」がそれにあたる）。*zelta* は男性名詞 *zelts*「（素材が）金」の単数・属格。ただし、ここでは形容詞的な用法（意味は当然、「金色の」ではなく、「金でできた」）。*oliņu* は女性名詞 *ola*「卵」の指小辞形 *oliņa* の単数・対格。副詞 *tad* は *then* の意味。*man* は人称代名詞 *es*「私（は）」の単数・与格で「私に」の意味。動詞 *atrakstiet* の不定形は *atrakstīt*「（手紙を）書いて出す（送る）」の2人称・複数・命令形（*at-*については⑥の文を参照）。

全体の意味は、「そのアヒルが金の卵を産んだときには、私に手紙を書いて送ってください」。

## 5. 注解⑭～⑮

⑭ Mana adrese:

BALTAIS KURMIS GAUJMALĀ

⑮ P.S. Varat arī to visu uzzīmēt, tikai — ar baltu krāsu, bez nevienas melnas svītriņas.

⑭ Mana は所有代名詞 mans「私の」の女性・単数・主格。adrese「住所」は女性名詞・単数・主格。合わせて「私の住所」となる。BALTAIS は限定形形容詞で⑤の文に既出。KURMIS「モグラ」は男性名詞・単数・主格。GAUJMALĀ（女性・単数・位格）は「ガウヤ川の堤防（における）」の意味で、Gauja と mala「堤防」の複合語。

全体の意味は、「私の住所：ガウヤ川の堤防に住む白いモグラ」。これまでに出てきた「私」や「私たち」は結局「白いモグラ」だったことがここで分る。

⑮ P.S.「追伸」は英語 *postscript* からの借用と思われるが、男性名詞 *postscripts* の頭字語。Varat は、今までに数回出てきた *nevarēt* (*be unable to*) と同様、法助動詞 *varēt* (*be able to*) の2人称・複数・現在。意味は本来「～することができる」(可能) だが、「～しても構わない」(許可) にも相当する。ここでは後者に解釈する。結びつく動詞不定形は *uzzīmēt* 「～を描く、素描する」(*uz-* については①の文を参照)。arī「～もまた」。to は指示代名詞 *tas* の男性・単数・対格。

*visu* は包括代名詞 *viss* 「全てのもの」の男性・単数・対格。「そのこと全てを」は動詞 *uzzīmēt* の目的語。「そのこと全て」の具体的な内容は、前述の⑬の文で言及された「アヒルが金の卵を産んだときの様子」であり、手紙以外の方法でも構わない、あるいは手紙にその光景の描写を添えても構わないことを追記している。

tikai は *only* の意味。ar は⑫の文にも出てきたが、手段を示す前置詞で、支配する名詞は具格になる。baltu は女性・単数・具格。krāsu は女性名詞 krāsa 「色、カラー」の単数・具格。ここでの意味は「白い色で」となる。前置詞 bez (*without* の意味) は属格支配で、直接以下の女性名詞 svītriņas にかかる。svītriņas は指小辞 svītriņa 「縞模様、線」の単数・属格。nevienas は「何も～ない、一切～ない、誰も～ない」の意味（否定代名詞「女性形」neviens の単数・属格）。melns は形容詞 melns 「黒い」の女性・単数・属格。ここでは「一切黒い色の線を使わず、白い色だけを使って」となる。

全体の意味は、「追伸：一切黒い色の線を使わずに、白い色だけを使って、そのこと全てを描いて下さっても構いません」。

(2010年 1 月24日)

---

(追記1) ラトヴィア民謡中の「太陽歌謡」(*sun-songs*) に現れる「白色」の意味を扱った興味深い考察が次の論文である。この追記ではその存在を指摘するだけにとどめる。

Vaira Vīķis-Freibergs, "A Structural Analysis of Lexical and Contextual Semantics—Latvian *BALTS* 'White' in Sun-Songs," *Journal of Baltic Studies*, 11-3 (1980), 215-230.

著者は知る人ぞ知るラトヴィア共和国大統領(1999～2007)だった人物で、上の論文は彼女がまだカナダのモントリオール大学教授であったころに執筆されたもの。その当時から彼女は(その夫君 Imants Freibergs 氏とともに)「太陽歌謡」の卓越した研究者で、1997年以降、その集大成ともいえるべき3巻本の著書 *Trejādas saules* (*The Threefold Sun*) をラトヴィア本国で出版している。(序ながら、この原著タイトル中の *saules* 「太陽」は複数形なので、英訳は厳密には *Suns* とすべきであろうが、原著中に添えられている英訳に従い、ここでも単数形のままにしておく。)

(追記2) 「カマス」はラトヴィア民謡でも歌われている大型の魚で、「緑のカマス」を主題とする次の歌が有名である(*lidaciņa* は *lidaka* の指小辞形)。和訳は筆者の試訳である。ラトヴィア人の共通認識としては、「カマス」は「若い女性」の連想的イメージを含意するといわれている。

Ai, zaļā lidaciņa,  
Nāc ar mani rotāties;

やあ、緑のカマスよ、  
私のところへ遊びにやっこい。



Tu dziļā jūrīnā,	お前は深い海の中にいて、
Es ozola laiviņā.	私は樫の木の小舟に乗っている。
Iet laiviņa dziedādama,	歌いながら小舟が進むと、
Nāk lidaka dancodama.	カマスは踊りながら近寄ってくる。

(出典：A. Kronenbergs： *Tautas Dziesmu Vācēlīte*, Rīga [1987], p.14)

なお、上記の出典に基づくこの民謡を科学アカデミー版テキスト（言語・文学研究所編、第3巻、1981）で詳細に調べると、最初の4行までが単独の民謡（番号12962）であり、最後の2行は直前の同種民謡（番号12961）の後半部をそのまま借用し、2つの民謡を合わせたような構成になっている。

このように、ラトヴィア民謡では原型となる民謡中の話題を展開させるために、別な同種民謡の一部を柔軟に組み合わせることが頻繁に見られる。

余談ながら、ツライダの広大な「民謡公園」（Dainu parks）には、筆者の知人でもある彫刻家インデュリス・ランカ（Indulis Ranka）が制作した多数の石像彫刻が配置され、その中に、上述の民謡「緑のカマス」をモチーフとする彫刻が含まれている。

（追記3）今回この注解を執筆するにあたり、下書き原稿をリンダ・ガルワーネ（Linda Galvane）さん（大阪大学大学院文学研究科〔比較文学専攻〕在籍のラトヴィア人留学生）に読んでいただいた。その際、彼女の母語ラトヴィア語の持つ微妙な意味的ニュアンスや、名詞が意味する指示物についての特徴などを指摘していただいた。同時に語学的な多数のコメントも賜った。筆者にとってはあくまでも外国語であるラトヴィア語の理解において、自分自身の言語的分析は表面的である場合が多い。従って、彼女の指摘や意見は極めて有益で貴重な情報（それも立派な日本語による説明つきで！）ばかりであった。おかげで、原稿では数か所において（筆者が予想していた部分も、思いがけない部分も含め）、この注解にとっては必要な修正、訂正を施すことができた。

その結果、注解というこの種の考察にありがちな、筆者による独りよがりな解釈や思い込みに陥らずに済んだ部分が多い（ただし、未だ残っているであろう誤謬や、説明不足は筆者の責任であることはいうまでもない）。この場をお借りして、ガルワーネさんのご厚意とご助力に對し心からの感謝を捧げたい。